

下田歌子展

下田歌子(幼名せき)は、安政元年(1854)岩村に生まれた。明治4年(1971)父のあとを追って上京し、翌年、和歌の才能を認められて、師の八田知紀、高崎正風らの推挙により、宮中に出仕する。宮中では、その才能を皇后(後の昭憲皇太后)に愛でられ、「歌子」の名を賜ったと伝えられている。また、下田歌子と「源氏物語」とのかかわりは、少女時代に始まる。単にあこがれにすぎなかったが、後に国文学研究の原点というべきものとなり、実践の下田歌子の源氏物語講義は、早稲田の坪内逍遙のシェークスピア論とともにすばらしい講義として東京中で、評判になったという。大学図書館下田歌子資料室に所蔵されている資料を展示する。

1. 短冊<幼年期>

- ・冬森 せき子 10才 文久三年 (2353)

「冬の日に そよ吹風の春たえて ふり積りたる 森の白雪」

- ・白きかめによする祝を せき子 12才 慶応元年 (813)

「萬代もおさむる君か 旗いろに かめさへ白くあらハれにけり」

短冊<青年期>

- ・雨中萩 せき子 内議十三等出仕 [明治七年] (825)

「露にさへこゝろおかるゝ 秋萩の はなこき乱し むらさめそふる」

- ・よろこびを取やもちひの... [明治七、八年] (1711)

「よろこびを取や もちひのかしきより はかりしられぬ 四方の民の戸」

短冊<壮老年期>

- ・春草 (796)

「黒土をもたくる草に新らしき ちからも見えて 春はうれしも」

- ・春山にまうてゝよめる (4661)

「みくるまもミはたも見えず 打ち仰く 目路はさきりの立ちへたてつゝ」

2. 源氏物語 かげろふの巻及び源氏香図 (2945)

1枚 37.5×52cm 鳥ノ子紙 [昭和初期]

「ありとミて 手にはとられず 見れはまた 行へもしらす 消えしかけるふ」

* () は実践女子大学図書館下田歌子関係資料の出納番号